Japanese Association of Art Education　Newsletter No.115　February 20th, 2024

美術科教育学会通信 No.115　2024 年 2 月 20 日

□巻頭言　□第 46 回弘前大会案内（最終案内）　□第 46 回弘前大会案内（研究発表者及び発表演題一覧）
□臨時理事会報告　□新企画　理事通信 Director's Message　□本部事務局より

巻頭言　Introduction

学生会員のこと　JAAEd Student Membership System Started.

副代表理事　相田隆司（東京学芸大学）
Deputy Director: Takashi AIDA, Tokyo Gakugei University

1. はじめに

本部事務局のお手伝いをはじめて２回目の年度末をむかえようとしています。２月 20 日現在，今年度第２回，第３回理事会や総会が未だ開催されておりませんので，学会の今年度が終わるという感覚はまだありませんが，この２～３月の時期は会計監査や次の予算の検討がなされる時期でもあり，事務局では少しずつ新年度に向けた準備をはじめていく時期でもあります。本部事務局では，そんな年度の橋渡しをするための作業をしている時期なのですが，ここでは今年度の美術科教育学会のトピックの一つとして“学生会員の導入”について触れます。

2. 学生会員制度がスタート

17 名。この人数は 2023 年度 第１回理事会（2023 年９月 10 日）の審議で承認された学生会員の方の人数です。学会通信 №113（2023 年６月 20 日発行済）の学生会員入会受付開始に関する記事にあるように，2023 年４月より学生会員制度がスタートしています。

本制度導入の源流は，第 11 期理事会（山木朝彦代表理事・現理事）のもとで始動したワーキング・グループ（美術科教育学会の運営改善に資する検討ワーキング・グループ）の最終報告を受けて，直江俊雄代表理事が 2022 年度 第１回理事会において提案した具体策案にあります。理事会にて資料提示されたその具体策案の内容は，ワーキング・グループからの会員数確保，若手支援への提言等を受けて示されたものであり，今回の学生会員の整備・導入につながる具体策案として，学部生の学会入会，教育職１年目の方の支援，現職教員の大学院生も学生会員として支援，といった方向性が示されています。

3. 学生会員にできること・できないこと

学会通信 №113 に掲載の「学生会員を新設します」に学生会員の内容と出来ること，出来ないことが端的に示されていますので，下に引用します。

■学部生から入会可能。■美術教育研究に興味をもつ若い世代の参加を奨励します。■会費はワンコイン（年 500 円）。学ぶ人々の負担を軽減します。■現職で大学院に学ぶ場合も学生会員として登録できます。■卒業後に教職に就いたら「教職スタートアップ」として学生会員を１年間継続できます。

学生会員ができること●学会誌の受け取り●学会通信等，会員への情報の受信●学会大会での研究発表●学会誌への論文投稿（大学院生のみ）●リサーチフォーラムの企画提案●自分の興味ある分野の研究部会への参加●その他，会員が研究交流のために参加できる様々な活動。

学生会員ができないこと●役員選挙の投票と役員への就任。（引用以上）

4. 学生会員資格終了時の手続き・対応へのお願い

この学生会員はまだまだ導入されたばかりですが，学生会員資格が終了する在学最終年度に必要となる大事な手続きがあります。学生会員の皆様には，正規の在学最終年度が終了する時期に当学会本部事務局支局から次年度について電子メールで照会があります。該当者に届く案内のメール内容を下にお示しします。終

了後の選択肢とそれぞれの手続き方法が提示されますので対応をお願いします。

＜学生会員の資格終了時の手続きについてのご案内＞
美術科教育学会学生会員の皆様には，正規の在学年度が修了する時期に，次年度の会員資格を選択いただきます。次の①～④の４つの選択肢があります。
①学生会員継続（進学・留年等），②正会員として入会，③教職スタートアップ，④退会，以上の４つです。
このうち③教職スタートアップとは，学生会員であった者が卒業後すぐに教職（幼保・小・中・高・大学・専門学校）に就いた場合，最初の１年度に限り学生会員としての資格を継続できるものです。非常勤講師・産休補助教員・博士課程修了後の研究員（ポスドク）等も含みます。所定の届と在職を証明する書類を提出し，理事会の承認を得て認められます。
尚，次年度からの希望については，紹介者（指導教員）に必ず連絡や相談をしたうえで，本部事務局支局にご回答ください。①～④の手続きは以下の通りです。
（―中　略―）
①学生会員の資格を延長する
本部事務局支局に以下の項目を記載したメールを送付する。
・会員氏名・会員番号
・指導教員所属（大学名，所属部局名）・氏名
・令和６年度学生会員資格延長理由
（※進学を理由とする場合には新しい在籍先を登録する（４月以降等）ものとする。支局にメールにて連絡し，「所属変更届」を入手・必要事項を記入の上郵送する。）
・指導教員意見
②正会員として入会する
本部事務局支局にメールで連絡し，「正会員移行申請書」の書式をメールで受領，必要事項を記入の上，本部事務局支局にご郵送ください。
学生会員から正会員への移行は，卒業・修了年の２月20日迄（以降決定者は５月迄）とし，会費納入は申請承認後の予定です。
③教職スタートアップの適用を受ける
本部事務局支局にメールで連絡し，「教職スタートアップ申請書」の書式をメールで受領，必要事項を記入の上，本部事務局支局へご郵送ください（採用を証明する書類（採用通知，辞令等）の写しを同封してください）。学生会員から教職スタートアップへの移行は，卒業・修了年の２月20日迄（以降就職者は５月迄）とし，会費納入は申請承認後の予定です。
④退会する
理由を付して退会届を学会事務局へご郵送ください。（書式自由）

上の枠内のとおり，学生会員継続延長，正会員への移行，教職スタートアップの適用を受ける，退会する，のうちから選択し手続きしていただきます。
この＜学生会員の資格終了時の手続きについてのご案内＞メールは，在学最終年度の１月に本部事務局支局より該当者に配信されます。学生資格を延長する場合で，進学等で所属先が変わる場合は「所属変更届」を学生証の写しと共に支局に郵送してください。現在のところ，正会員として入会する場合と教職スタートアップの適用を受ける場合の手続き締切は，今年度は２月20日に設定（以降決定者は５月迄）しています。学生会員継続延長に際し提出が必要な「所属変更届」，正会員として入会する場合に提出が必要な「正会員移行申請書」，教職スタートアップの適用を受けるため提出が必要な「教職スタートアップ申請書」の３つの書式は，本部事務局支局へのメール連絡にて入手してください。現在のところ，本学会の Web ページ（https://www.artedu.jp/jaaed/nyukai）には，現在正会員の方が，学生会員への移行を希望される場合の申請書である「学生会員移行申請書」がアップロードされていますが，「所属変更届」，「正会員移行申請書」，「教職スタートアップ申請書」の３点についてはアップロードしていません。今後の状況につき見極めながら適宜対応を検討してまいります。
今後，この３月開催予定の次回理事会でも学生会員の入会申請が審議される予定です。学生会員で入会される方が増えることも予想されます。そのことによって，当学会が，より多くの会員とさらに幅広い視野を獲得していくことを期待したいと思います。

「学生会員に関する申し合わせ」はこちらをご参照ください。（https://www.artedu.jp/gaiyou/kaisoku）

第 46 回弘前大会案内（最終案内）

Final Notice of the 46th Conference in Hirosaki

写真：弘大カフェ（旧制弘前高校外国人宣教師館）と桜

第 46 回美術科教育学会弘前大会

大会実行委員長　佐藤絵里子（弘前大学）

第 46 回美術科教育学会弘前大会

大会テーマ「教室から通路をひらく／そのかたち，その先にあるもの」

今年の東北各地は暖冬に恵まれ，弘前でも雪による交通面での支障は例年よりも少なく見積もっております。しかし媒体によっては，開催当日の天気を雪や雨と予報しているケースもあり，なかなか予測がつきません。

本大会は 80 件の口頭研究発表を予定しており，盛況が予想されます。事前申込の期限まで，残すところ僅かです。ご検討中の方はお忘れなきよう，お取り計らいください。

お越しになる方は，体温調節と履物の選択が快適さの鍵となります。皆様のご参加をお待ちしております。

開　催　概　要

- 会期：2024 年３月２日（土）・３日（日）
- 会場：弘前大学文京町キャンパス
  （教育学部校舎，50 周年記念館）
- 形式：対面開催
- 主催：美術科教育学会
- 共催：弘前大学教育学部
- 後援：青森県教育委員会
  国際美術教育学会 InSEA
  五所川原市教育委員会
  弘前市教育委員会
  弘前大学
- 弘前大会ホームページ
  https://sites.google.com/view/jaaed-hirosaki

《各種申込用ホームページはこちら》

事前申込は，２月 23 日（金）まで

まだ間に合います！　※ 当日受付有

① 大会参加申込（Peatix）
https://hirosaki2024-convention.peatix.com

② 懇親会申込（Peatix）
https://hirosaki2024-social-gathering.peatix.com

③ 非学会員向け・限定チケット申込（Peatix）
https://hirosaki2024-non-members-only.peatix.com

① 大会参加　② 懇親会　③ 限定チケット

◆ 参加費

	学会		懇親会	
	事前申込	当日受付	**事前申込**	当日受付
支払い方法	**Peatix で清算**	現金払	**Peatix で清算**	現金払
正会員※	**4,500 円**	5,000 円	**6,000 円**	6,500 円
非会員	**5,500 円**	6,000 円	**6,000 円**	6,500 円
学生会員※※	**2,500 円**	3,000 円	**4,500 円**	5,000 円

※「大学美術教育学会」又は「日本美術教育学会」の会員は本学会会員と同様に，正会員の料金で参加できます。

※※「学生会員」は，本学会に「学生会員」として登録済みの会員のことを指しています。なお「学生会員」に該当している方は，在職の有無は問わず，「学生会員」の料金でご参加いただけます。それ以外の学部生・大学院生，聴講生，研究生，科目等履修生は「正会員」「非会員」のどちらか該当する方でのご参加となります。

弘前大会では上記の他に，３月２日（土）の午後に 50 周年記念館で開催されるイベントを対象とした，非学会員のみが購入できる「限定チケット」を 1,500 円で販売中です。

◆ 大会日程

【１日目】2024 年３月２日（土）9:30〜17:50

9:00	教育学部校舎　受付開始	教育学部校舎
9:30〜11:45	口頭研究発表 ①9:30〜10:00 ②10:05〜10:35 ③10:40〜11:10 ④11:15〜11:45	
11:45〜12:30	〜昼休憩〜	
11:45	50 周年記念館　受付開始	50 周年記念館 「みちのくホール」
12:30〜12:40	開会式	
12:40〜15:00	「シンポジウム　新しい先生たちは毎回生まれる」 鴻池朋子さん（現代アーティスト） 奥脇嵩大氏さん（青森県立美術館学芸員）	
15:10〜16:10	国際局事業「アートベースドヒューマニティ： 芸術による学習を国際美術教育学会（InSEA）とともに」 グレン・クーツさん（InSEA 会長/ フィンランド・ラップランド大学教授）	
16:20〜17:50	研究部会	教育学部校舎
18:30〜20:30	懇親会・表彰式　18:30 受付　19:00 開始	アートホテル弘前シティ ３階プレミアホール

【２日目】2024 年３月３日（日）9:30〜17:00

9:00	教育学部校舎　受付開始	教育学部校舎
9:30〜11:45	口頭研究発表 ①9:30〜10:00 ②10:05〜10:35 ③10:40〜11:10 ④11:15〜11:45	
11:45〜12:30	〜昼休憩〜	
12:30〜14:00	実行委員企画① 高松智行さん（横須賀市立明浜小学校ことばの教室，カマクラ図工室代表） 八嶋孝幸さん（弘前大学教育学部附属小学校） 実行委員企画② 内田裕子さん（埼玉大学） 若松大輔さん（弘前大学大学院）	教育学部校舎 １F 大講義室 ２F 大講義室
14:10〜17:00	口頭研究発表　①14:10〜14:40 ②14:45〜15:15 ③15:20〜15:50 ④15:55〜16:25　⑤16:30〜17:00	教育学部校舎

◆ 研究発表について

〜口頭研究発表を予定している方へ〜

演題登録の際に Google Forms でご入力いただいたメールアドレスへ「発表者マニュアル」を配信済です。機器の接続・動作リハーサルの時間帯，発表の流れと時間配分，事前準備について記載されております。迷惑メールフォルダに振り分けられている可能性がございますので，ご確認いただきますようお願い申し上げます。

(1) 発表時間 30 分（発表 20 分，質疑 20 分）

司会の進行と予鈴・本鈴に従い，時間厳守でお願いします。

(2) 使用機器・配布物

発表にパソコンやタブレット等を使用する場合は，各自で持参してください。プロジェクターへの接続は HDMI が基本となります。Mac，iPad 等の接続は各自変換アダプターを用意してください。各会場には，プロジェクター，スクリーン，Bluetooth スピーカーが備え付けられております。配布物を用意される方は事前に，会場入り口付近の机に置いてください。

◆ 会場と wi-fi 環境について

(1) 口頭研究発表，研究部会，実行委員企画の会場は「教育学部校舎」です。開会式，シンポジウム，国際局事業の会場は「50 周年記念館」です。「教育学部校舎」と「50 周年記念館」は弘前大学文京町キャンパスにあります。懇親会場は弘前駅中央口を出て左手すぐの「アートホテル弘前シティ（３階プレミアホール）」です。

(2)　当日の大会参加受付は教育学部校舎正面入口，非学会員向け限定チケットの受付は 50 周年記念館入口，懇親会受付は懇親会場入口で行います。

(3)　当日の wi-fi 環境については，国際学術無線 LAN ローミング基盤「eduroam」を使用し，最大 250 名分の ID とパスワードを発行します。ID とパスワードは，概要集その他と一緒に受付でお渡しします。

◆ 会場までのアクセス

・弘前大会・懇親会会場への行き方については，下記の QR コードから各種ホームページをご覧ください。

弘前大学への アクセス

アートホテル弘前シティの HP

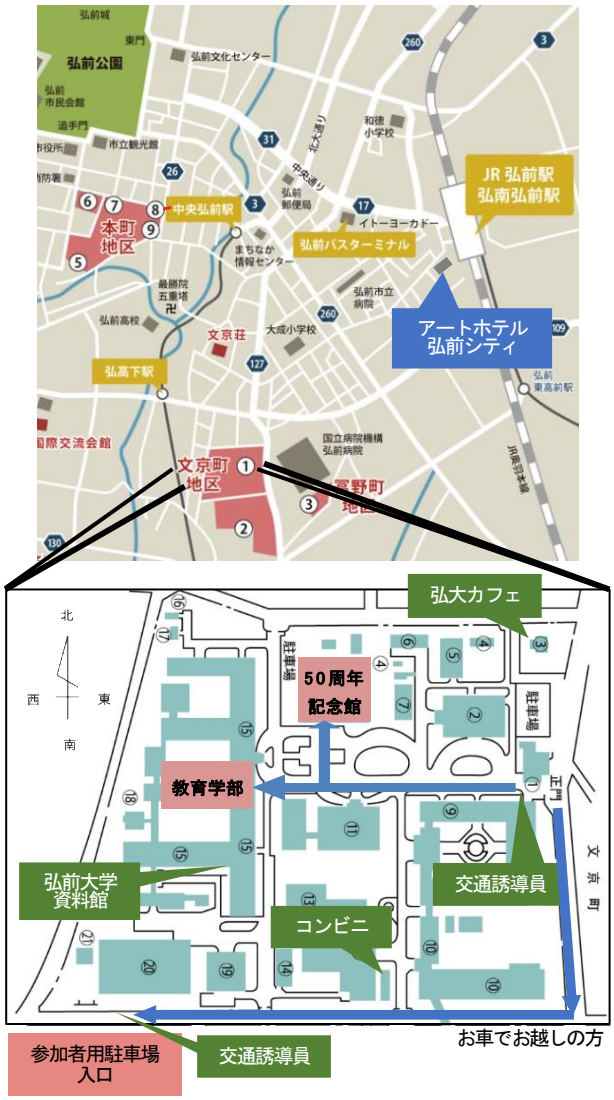
・大学から懇親会場までの移動方法については，弘前大会事務局にてご提供できる方策を検討中です。新たな情報を弘前大会ホームページ等でお知らせする可能性があります。

・朝・夕のタクシー利用を検討されている方へ。タクシーの当日予約は台数に限りがあるため，事前予約をお勧めします。参考：北星交通タクシー（TEL:0172-33-3333）。

・駐車場は 40 台分を確保しておりますが，それを超える分は先着順となります。土日は駐車場のゲートは常時開放されます。駐車場所については，交通誘導員の指示に従ってください。

JR 弘前駅から文京町キャンパスへの行き方

- 徒歩の場合（約 20 分）※ 晴天時
- タクシーを利用する場合（約５分）
- バスを利用する場合（約 15 分）
  JR 弘前駅前（中央口）【３番のりば】
  「小栗山・狼森線」または「学園町線」に乗車【弘前大学前】または【弘大農学生命科学部前】で下車



◆ 宿泊について

・本大会では宿泊施設の斡旋は行なっておりません。ご自身での近隣の宿泊施設への予約をお願いします。

・本大会は弘前観光コンベンション協会の MICE 助成金へ申請しています。県外からの参加者の延べ宿泊数が 100～299 人で 30 万円以内，300～499 人で 50 万円以内の助成が行われます。宿泊をされる方は，可能な限り，青森県内の宿泊施設をご利用いただきますようお願い申し上げます。

◆ 食事について

・お弁当の用意はしておりません。構内のコンビニ（生協サリジェ）は２日（土）9:00～18:00 営業，３日（日）休業です。学食は両日とも休業です。休憩時に各発表会場を開放しますので，持参された昼食をお召し上がりください。構内の弘大カフェ成田専蔵珈琲店は土日営業します。メニューは珈琲とデザートが中心です。

◆ その他

・教育学部校舎受付では，全員に宿泊に関するアンケートをご記入いただきます。お早めにお越しください。

・懇親会は事前申込を基本としてください。当日申込は，提供可能な飲食物の量に影響を与えます。

・弘前大学資料館（教育学部校舎１階）は３月２日（土）9:00～17:00 と３日（日）9:00～14:30 に開館します。企画展示室にて，五所川原市教育委員会，弘前大学教育学部附属中学校と連携した「津軽地方の教育版画―昭和・平成・令和の子どもたち―」展を開催中です（無料）。

【第 46 回弘前大会に関するお問い合わせ】実行委員会事務局　E-mail：mailto:hirosaki2024.jaaed@gmail.com

第 46 回弘前大会最終案内（研究発表者及び発表演題一覧）

Final Notice of the 46th Conference in Hirosaki: List of Presenters and Presentation Titles

第 46 回美術科教育学会弘前大会

大会実行委員長　佐藤絵里子（弘前大学）

第 46 回美術科教育学会　弘前大会スケジュール

【１日目】2024 年３月２日（土）午前《研究発表Ⅰ》　★9:00 教育学部校舎受付開始

	口頭発表 A 【１F 中教室】	口頭発表 B 【2F 202 教室】	口頭発表 C 【2F 203 教室】	口頭発表 D 【3F 302 教室】	口頭発表 E 【3F 303 教室】	口頭発表 F 【1F 大講義室】
① 9:30 ～ 10:00	芸術表現と科学体験を活かした教科横断的な教育課程の構築－小学校６年生における地域学習の単元開発を例として－ 藤井 康子[1]、西口 宏泰[2]、麻生 良太[3]、白澤 和文[4]、伊東 俊昭[5]（1.大分大学教育学部、2.大分大学研究マネジメント機構、3.大分大学教育学部、4.佐伯市立明治小学校、5.佐伯市立明治小学校））	画塾「彰技堂」の講義録「水彩寫景指南」と英語原書の比較について－技法・材料の観点から－ 重村 幹夫（仁愛女子短期大学）	ねぶたの技法を生かしたワークショップの実践的研究－「地域ねぶた」の再創造を目指して 市川 寛也[1]、太田 空良[2]（1.群馬大学共同教育学部美術教育講座、2.岩手大学人文社会科学部学部生）	「指導と評価の一体化」について考える～公立中学校における実践の様子から～ 濱脇 みどり（東京学芸大学）	教職員の多様性を生かした校内研修－内発的改善力を促進する図画工作科の題材開発を中心に－ 壱貫田 裕美（広島大学大学院人間社会科学研究科　教職開発専攻）	幼児期の主体的な造形表現活動についての一考察－中動態の視点から考える－ 海沼 恭史（早稲田大学大学院教育学研究科修士課程）
② 10:05 ～ 10:35	ART を主軸とした STEAM の実践Ⅱ～空間認識と美術解剖学～ 渡邊 晃一（福島大学）	「美術」と「美術教育」の距離に関する一考察:東京美術学校の試みと作家の葛藤にみる「美術」 中村 仁美（和光大学）	“生もの”としてのアートが展開される芸術祭と教育事業－Reborn-Art Festival を例に 志村 春海（フリーランス、コーディネーター）	構想過程に対話を導入することの有効性に関する研究－デザイン題材「特別教室のピクトグラム制作」の実践を通して－ 鎌田 純平（弘前大学教育学部附属中学校）	自然物とその影を描写する CONNECTEDkind 体験者の脳波分析 永田 佳之[1]、水島 尚喜[2]、野島 雅[3]（1.聖心女子大学教育学科、2.聖心女子大学教育学科、3.東京理科大学総合研究院）	保育士研修会における色彩造形表現の可能性 葉山 登（色彩造形研究所）
③ 10:40 ～ 11:10	ART を主軸とした STEAM の実践Ⅲ－美術解剖学とアニメーション－ 廣川 豪（福島大学附属中学校）	国民学校芸能科図画鑑賞指導用掛図を活用した戦時下における対話的美術鑑賞教育－西田秀雄著『日本美術と児童画』より－ 勅使河原 君江（神戸大学人間発達環境学研究科）	学習者の変化のプロセスを可視化する質的研究方法 TEA の可能性－アートプロジェクト《二重のまち／交代地のうたを編む》事例に－ 梶原 千恵（九州大学芸術工学府）	個別最適な学びの力を育てる図画工作科の授業開発 大矢 孟（広島大学）	アファンタジアタイプにおける描画イメージ生成の困難性に関わるインタビュー調査 石原 由貴[1]、髙橋 奈里[2]、佐原 理[3]（1.金沢工業大学、2.名古屋市立大学、3.徳島大学）	幼児を対象とした「造形遊び」による場（空間）に関する実践的考察－紙を丸めた棒を使って－ 蝦名 敦子（柴田学園大学短期大学部）
④ 11:15 ～ 11:45	社会に開かれるキュレーション型鑑賞の可能性－中学校 3 学年での授業実践を踏まえて－ 小倉 千絵（茨城大学教育学部附属中学校）	秋田県図画教育における地方画家「伊藤弥太」の台頭 長瀬 達也（秋田大学大学院教育学研究科）	ワークショップにおける実践者の権威性の自己評価―権威の発生過程の研究に基づく評価視点― 東村 ほのか（早稲田大学大学院教育学研究科修士課程）	ファッションから探る美術教育の可能性－アート的身体の活性化に向けた実践研究－ 郡司 明子[1]、岩田 龍真[2]（1.群馬大学、2.群馬大学教職大学院）	美術科教育内容の「本質的な問い」と「永続的理解」(素案)の検討－教科書題材の質的な分析を方法として－ 森田 亮（明星大学、筑波大学大学院人間総合科学研究科博士後期課程芸術専攻）	乳幼児の造形表現活動における保育者の主体性のとらえ方－保育士の意識調査から－ 池田 純子（淑徳大学短期大学部、早稲田大学大学院教育学研究科博士後期課程）
11:45～12:30　昼休憩						

11:45	50 周年記念館受付開始	50 周年 記念館 みちのく ホール	非学会員 限定 チケット 対象 イベント
12:30	開会式		
12:40 ～ 15:00	シンポジウム **「新しい先生は毎回生まれる」** 鴻池朋子(現代アーティスト) 奥脇嵩大（青森県立美術館学芸員）		
15:10 ～ 16:10	国際局事業 **「アートベースドヒューマニティ： 芸術による学習を国際美術教育学会（InSEA）とともに」** グレン・クーツ（InSEA 会長/ フィンランド・ラップランド大学教授）		

【１日目】2024 年３月２日（土）夕方《研究部会》

16:20 ～ 17:50	授業研究部会 【１F 中教室】	美術教育史研究部会 【2F 202 教室】	造形カリキュラム 研究部会 【2F 203 教室】	乳・幼児 造形研究部会 【1F 大講義室】	インクルーシブ 美術教育研究部会 【今回は開催なし】

【２日目】2024 年３月３日（日）午前《研究発表Ⅱ》　　★9:00 教育学部校舎受付開始

	口頭発表 A 【１F 中教室】	口頭発表 B 【2F 202 教室】	口頭発表 C 【2F 203 教室】	口頭発表 D 【3F 302 教室】	口頭発表 E 【3F 303 教室】	口頭発表 F 【1F 大講義室】	口頭発表 G 【2F 大講義室】
① 9:30 ～ 10:00	アニメーションにおける動きの表現探求ツールの開発② 布山 タルト（東京藝術大学大学院映像研究科）	不易と流行の視点で捉える東牟婁美協版画教育ー歴史と現在 西尾 正寛（畿央大学）	イタリアの美術館におけるアクセシビリティに関する調査研究ー視覚障害における多感覚鑑賞及び「みんなの美術館 “Museo per tutti”」プロジェクトを中心にー 茂木 一司[1]、手塚 千尋[2]、池田 吏志[3]、大内 進[4]、笠原 広一[5]（1.跡見学園女子大学、2.明治学院大学、3.広島大学、4. 星美学園短期大学日伊総合研究所、5.東京学芸大学）	ウェルビーイングにつなげるための図画工作科の実践をめざして 守屋 建（東京学芸大学附属小金井小学校）	造形活動の質的分析におけるトライアンギュレーションの可能性について 武田 信吾[1]、松本 健義[2]、栗山 誠[3]（1. 関西学院大学、2.上越教育大学、3.関西学院大学）	コミュニケーションツールとなる作陶を活用した教育プログラムー「創造的復興プロジェクトからコロナ禍の中での試みー」 齋藤 敏寿（筑波大学芸術系）	ユネスコ・フレームワークを踏まえた国際理解のための美術教育の実践開発 中村 和世（広島大学）
② 10:05 ～ 10:35	美術科教育の学習指導におけるデジタルデバイス活用の可能性と課題ーデッサン（素描）における表現効果の比較と題材開発を通してー 堀田 英子（早稲田大学大学院教育学研究科博士後期課程、日本大学芸術学部美術学科・神奈川県立光陵高等学校（非常勤講師））	長谷川三郎(1906-1957)の美術教育の構想ー長谷川の著作『図画教材研究』(1951)及び『新しい形の美』(1951)を中心に 宇田 秀士（奈良教育大学）	障害児・者による遠隔操作ロボットを用いた美術館・博物館鑑賞 池田 吏志（広島大学）	SNS 時代における「アートを介した対話の場」のあらたな役割 長井 理佐（横浜国立大学、東京女子体育大学(非常勤講師)）	女性アーティストのロールモデル的教材の可能性について 畑中 朋子（和光大学芸術学科）	地域に根ざした木育活動（２）ーSDGs を掲げる地域のイベントに携わる大学生の変容ー 三上 慧（東洋英和女学院大学）	中国における小学校美術教育の現状と課題 伍 翔南（早稲田大学大学院教育学研究科）
③ 10:40 ～ 11:10	美術における「1人1台端末時代」の教育コンテンツーデジタル美術資料集の開発ー 横田 学[1]、藤田 優[2]（1.京都市立芸術大学名誉教授、2.三田学園中高等学校）	東京造画館および有稲館の図画・手工教育掛図研究 牧野 由理[1]、金子一夫[2]（1.埼玉県立大学、2.茨城大学名誉教授）	茨城県立下妻特別支援学校におけるインクルーシブアートワークショップの実践報告 松崎 仰生（特定非営利活動法人チア・アート）	アートベースラーニングによる学習の現状と問題点ーTETAC プロジェクトと教育心理学の観点の比較考察を通してー 古川 拓明（多摩市立鶴牧中学校）	「造形遊び」の過程で子どもが目指す形とその典型に関する一考察ー小学校教諭の省察に基づくアクションリサーチを通してー 佐藤 絵里子[1]、外崎 美佳[2]、八嶋 孝幸[3]（1.弘前大学、2.弘前大学教育学部附属小学校、3.弘前大学教育学部附属小学校）	博学連携での博物館における学びに関する提言ー「日本の博物館総合調査報告書（2019）」の結果と鎌倉国宝館・藤澤浮世絵館における教育普及活動からー 大江 昭子（早稲田大学大学院教育学研究科博士後期課程、鎌倉国宝館）	国際協力と大学教育との連携ーモザンビークの生徒たちとの協働による絵本制作の実践活動ー 石田 恒平[1]、山田 猛[2]（1.東京造形大学、2.東京造形大学）

④ 11:15 ～ 11:45	美術における「1人1台端末時代」の授業展開とその課題－授業支援アプリ・デジタル美術資料集の活用－ 藤田 優[1]、横田 学[2]（1.三田学園中学校高等学校、2.京都市立芸術大学名誉教授）	美術科教科書 1956～2021 年度本3学年ないし 2・3学年㊦「見て表す」題材頁における解説文の検討 山口 喜雄 （元宇都宮大学）	スペイン・マドリッドにおける日本の図画工作科題材の実践～海外教育実習の可能性を模索しつつ～ 隅 敦（富山大学教育学部共同教員養成課程）	探究的な活動としての「ABR×フィールドワーク×展示づくり」－教員養成課程学生を対象としたワークショップ型学習環境デザインの実践－ 手塚 千尋[1]、佐藤 公[2]、佐藤 優香[3]、根本 淳子[4]（1.明治学院大学、2.明治学院大学、3.東京大学大学院情報学環客員研究員、4.明治学院大学）	創造主義を支えるシステムの顕在化－造形遊びにある主客への問い直し－ 小林 貴史（東京造形大学）	国吉型対話探求モデルの実践－大学資源と地域の文化芸術資源を基盤とした学際的展覧会の産官学による組成 才士 真司（岡山大学）	伝統美術・工芸の本質にふれる図画工作・美術科学習－＜日本の美意識＞および＜人との親和性＞を視点として－ 竹内 晋平（奈良教育大学）
11:45～12:30　昼休憩							
12:30 ～ 14:00	実行委員企画①【1F 大講義室】 **「2030 年以降の『美術すること』を考える ～教育実践のあり方と考え方～」** 髙松智行（横須賀市立明浜小学校ことばの教室，カマクラ図工室代表） 八嶋孝幸（弘前大学教育学部附属小学校）				実行委員企画②【2F 大講義室】 **「美術科教育のカリキュラムの考え方 （教科中心カリキュラムからの脱却）」** 内田裕子（埼玉大学） 若松大輔（弘前大学大学院）		

【２日目】2024 年３月３日（日）午後《研究発表Ⅲ》

	口頭発表 A 【１F 中教室】	口頭発表 B 【2F 202 教室】	口頭発表 C 【2F 203 教室】	口頭発表 D 【3F 302 教室】	口頭発表 E 【3F 303 教室】	口頭発表 F 【1F 大講義室】
① 14:10 ～ 14:40	プログラミング×アート教育が拓く新しい学び－ヘボコンの実験からみえる現在と未来－ 井上 昌樹[1]、茂木 一司[2]（1.育英短期大学、2.跡見学園女子大学）	創造性と美術教育との関係についての一考察－学制発布以降から現在に至るまでの日本の色彩教育との関係を中心に－ 松浦 藍（岡山大学）	教師の美術体験で育つ美術科授業づくりのメタファー 小口 あや （茨城大学）	3D 機器を活用した造形活動の試み－小学校3年生～5年生を対象としたワークショップについて－ 白石 恵里（大分県立芸術文化短期大学）	アートを通して南極とつながる－高校国語科と美術科による絵本制作を通した授業実践－ 小松 俊介[1]、畑 綾乃[2]（1.筑波大学附属高等学校、2.筑波大学附属高等学校）	
② 14:45 ～ 15:15	子どもの問題発見から萌芽する図画工作科の授業実践とその可能性（１）：課題解決に向かう姿に見る習得と活用の往還 粟津 謙吾（成城学園初等学校）	学習指導要領の内容としての「造形遊び」の考察～教科書題材に着目して～ 山田 芳明（鳴門教育大学大学院学校教育研究科）	中学校美術科初任者研修の現状とあり方－「教員不足・採用倍率低下」時代における対応についての一考察－ 荒川 洋子（新潟市立石山中学校）	事例報告：美術科授業のクラウド活用「生徒、教師、学校」三方得 中川 知子（つくば市立高崎中学校）	高等学校美術科における「素材研究」の提案－埼玉県立飯能南高等学校　立体領域での実践から－ 瀧澤 悠（埼玉県立所沢北高等学校）	大学におけるアートライティング教育の実践と意義－「名作の彩り」の事例から－ 吉田 奈穂子[1]、宮坂慎司[2]、中川 三千代[3]（1.筑波大学、2.筑波大学、3.筑波大学芸術系研究員）
③ 15:20 ～ 15:50	子どもの問題発見から萌芽する図画工作科の授業実践とその可能性（２）：STEAM 理念にみる課題解決と教科概念の拡張を志向して 畑山 未央[1]、粟津 謙吾[2]（1.植草学園大学、2. 成城学園初等学校）	子どもの論理による美術教育の思想史的検討－「子どもの論理」はなぜ「美術の論理」にならなかったのか－ 金子 一夫（茨城大学名誉教授）	自己エスノグラフィーによる高等学校美術教員の授業観の分析 黒木 健（筑波大学大学院人間総合科学学術院人間総合科学研究群（博士後期課程）芸術学学位プログラム）	ICT を活用した子どもの表現を引き出す授業実践 渡邉 美香（大阪教育大学）	他者と緩やかにつながる場としての造形表現活動－土粘土を使った活動を中心に 岡野 茜（東京学芸大学非常勤講師）	美術鑑賞学習における美的判断ジレンマの題材開発と実践－「フェルフェル美術館のピンチ」の事例を通して－ 廖 曦彤 （山形大学地域教育文化学部）

④ 15:55 ～ 16:25	幼児期における美術と科学の出会い～絵本を手がかりにして～ 鈴木 美樹（福島学院大学）	美術教育学の段階的制度整備過程―美術科教育学会を中心に― 有田 洋子[1]、金子 一夫[2]（1.島根大学、2.茨城大学名誉教授）	アートの手法を活用した教員養成：ドラマワークと美術ワークによる学習者と教師の変化 岩﨑 仁美（北海道教育大学）	中学生のデジタルファブリケーション体験の授業実践から 山内 佑輔（新渡戸文化学園、東京学芸大学院教育学研究科修士課程）	「考えて組立てる」深化点からみる芸術知概念－「試験管を用いた花器」授業実践のワークシート検討とその分析から－ 髙橋 文子[1]、湯瀬 明意[2]（1.東京未来大学、2.川崎市立渡田中学校）	美術鑑賞学習の方法に関する考察－美術教育関係学会の掲載論文を通して－ 新関 伸也（東海大学児童教育学部）
⑤ 16:30 ～ 17:00	美術と他教科・科目の関わりと深い学び～教科横断型授業の実践報告～ 伊藤 裕貴（福井県立武生高等学校）	近代日本図画手工教科書データベースの拡充とその活用に向けた調査研究 赤木 里香子[1]、金子一夫[2]（1.岡山大学、2.茨城大学）	大学生への学習支援－教育学部美術科生指導の現場で－ 笹原 浩仁（福岡教育大学）		構成教育における図案創発手法の再考と実践 大友 邦子（筑波大学芸術系）	図画工作科における真正な「社会に開かれた教育課程」の実現を支える教育観－E.W.アイスナーの「融通性」概念への着目－ 前島 彩見（早稲田大学大学院教育学研究科修士課程）

2023 年度　第 1 回，第 2 回　臨時理事会報告

Report on Extraordinary Board of Directors Meeting for 2023

本部事務局　　相田隆司（東京学芸大学）

美術科教育学会 2023 年度，第１回，第２回臨時理事会について以下の通りご報告いたします。

第１回臨時理事会

(1) 開催方法と議題

①開催方法：電子メールにより議題提示を行い，メールの返信によって回答を行うものである。回答期間終了後，回答結果を理事会に電子メール報告した。開催期間は，2023 年 10 月４日（水）～８日（日），参加者は全理事 21 名であった。尚，回答期間が限られていることから，メールにて回答のなき場合は，原案どおり承認したものとみなす旨周知された。

②議題：弘前大会での InSEA 会長講演の国際局事業開催についての審議１件であった。本議題は，美術科教育学会第 46 回弘前大会におけるグレン・クーツ氏講演を，国際局事業として開催すること，並びに，講演開催にかかわる運営業務は，国際局の中で協力が可能なメンバーと受け入れ側研究者が中心に行うという提案について審議するものであった。

(2) 審議結果

審議結果は次の通りであった。承認：21 名（うち回答返信のない承認は８名），反対：０名。

審議の結果，原案通り承認された。審議結果は，10 月 11 日(水)に上の通り理事会に電子メール報告された。また，理事会への追加の電子メール報告として，11 月１日(水)に，承認票の内訳（回答返信による承認か否かにつき理事名を報告），審議の際に理事から頂いたご意見３件が報告された。

第 2 回臨時理事会

(1) 開催方法と議題

①開催方法：電子メールにより議題提示を行い，メールの返信によって回答を行うものである。回答期間終了後，回答結果を理事会に電子メール報告した。開催期間は，2024 年１月 23 日（火）～１月 28 日（日），参加者は全理事 21 名であった。尚，回答期間が限られていることから，メールにて回答のなき場合は，原案どおり承認したものとみなす旨周知された。

②議題：弘前大会を InSEA 創立 70 周年記念行事とすることについての審議１件であった。本議題は，美術科教育学会第 46 回弘前大会を，2024 年の国際美術教育学会 InSEA 創立 70 周年記念行事の一つとすること，具体的には下記の連携を行うという提案について審議するものであった。

＜記＞

1. InSEA 創立 70 周年記念ロゴを弘前大会サイトなどに表示する。
2. InSEA のオンラインニュースなどで弘前大会を InSEA 会員等へ広報する。

(2) 審議結果

審議結果は次の通りであった。承認：21 名（うち回答返信のない承認は７名），反対：０名。

審議の結果，原案通り承認された。審議結果は２月１日(木)に上の通り，承認票の内訳（回答返信による承認か否かにつき理事名を報告），理事から頂いたご意見１件とともに理事会にメールにて報告された。

理事通信　Director's Message

哲学と詩と…美しい言葉の力を

理事（研究部）　佐藤賢司（大阪教育大学）
Director: Research Department, Kenji SATO, Osaka Kyoiku University

Kenji SATO "HIMAWARI"
International Mini Textile Art "SCYTHIA"
2023, Ivano-Frankivs'k, UKRAINE

美術教育界の多くの先輩たちは，後進の私たちに大きな財産を残してくれています。学会誌などに発表された論文はもちろん，日々のお話の「言葉」の中には，こどもたちへの思い，美術教育への思い，その人の哲学がつまっていました。それは時に強い言葉や，旧態依然とした権威に対する怒りの言葉にもなり，また一方では，実に詩的で美しい言葉でもありました。それは，話す言葉に止まらず，論文などにおいてもある種の「熱」をもって読者に迫るものでした。深く心に響き「この一文から論理をひろげ展開したい」と思う文章に幾度となく出会ったものです。いわゆる「研究のための研究」にはないこれらの美しい言葉は，研究者それぞれの個性となり，いまもなお生き生きと意味を立ち上げています。

現在の美術教育を俯瞰する力量も知見も私にはありませんが，それでも近年気になっていることがあります。それは（自戒をこめて）美術教育研究から，言葉の力が急速に失われているのでは…という実感です。

もちろん，「研究」である以上は，客観性（この言葉も実は怪しいのですが）は当然求められることであり，先行研究を踏まえた冷静な分析と新たな成果の提示は必須です。独善的な引用・解釈は，研究姿勢を問われる大きな問題であり，客観性を担保するためには，ある種の「型」は必要です。しかし――，型に則ったからといって，それが魅力的な研究なのかといえば，必ずしもそうではないでしょう。形式的には問題なく，破綻なく結論が示された論文が，文章としては著しく魅力に欠ける事例は決して少なくはありません。研究が自己目的化し，閉じた言葉の連なりが続く事例もいくつも見ることができます。具体的な数としての研究業績が求められる昨今，型による一定の論文生産は避けては通れません。しかし，あえて言葉を選ばずに言えば，そのような研究は，いったい誰の何に訴えるというのでしょうか。「わかりました。」けれども「だから？」という印象です。

いま，私たちが，引用したくなるような言葉，文脈に出会うことは容易ではないのかもしれません。教育をかたる言説―特に書籍やウェブ上の記事などは，流行のトレンドワードと多くの「右倣え」で溢れています。しかもそのワードのいくつかは，他の分野（例えば医療や工場生産など）で限定的に用いられていたものであり，それを都合よく拡大解釈した例すら少なくないのです。そんなワードを題目に掲げ，こどもの姿や美術の営みと，それとの合致性を示したとて，いったいそこにどんな言葉の命がやどるというのでしょう。

私の恩師（勝手にそう思っているのですが）は引用を「新たな命」と呼んでいました。それは説明のための道具や，昨今頻出の「論拠」「エビデンス」ではなく，誰かの言葉に新たな命を吹き込むことでもあるのです。引用，解釈は創造的である…あえて文系・理系などと区分けるのは時代錯誤なのかもしれませんが，少なくとも文系の研究者である私たちが美術と教育を語る言葉は，意味を立ち上げる美しい言葉でありたいと思います。誰かの思想の引用が「正しいかどうか」だけではなく，その引用がいかに豊かな意味を生成し得るかこそが重要です。

論文（に限らず，美術と教育を語る文章）は，私たちの視界を更新し，世界を見・語る新たな言葉を獲得させてくれます。「世界を広げてくれる」といってもよいでしょう。

２度目の引用になりますが，大泉義一氏が 2021 年の学会通信（No. 107）に寄せた文章の結びは，改めて私に重要な気付きと「言葉」を与えてくれたものでした。

> **私個人としても，研究を通して何らかの情報を伝えるだけでなく，同時に意味を伝えていくことを大切にしてゆきたい。その時に必要なのが，伝える側の＜情念（Pathos）＞なのではないか。笑われてしまうと思うが，筆者は「歌うように論文を書きたい」と，本気で思っているのである。**

また，この１月に刊行された『教育美術』誌（No. 979）の特集で，柴田和豊氏は，佐藤完兒郎の『美と教育のポエジア』（北冬書房 1990）を紹介する中，次のように思いを述べられました。

> **昨今の美術教育研究の進捗はかなりのものである。博論も増えている。しかし私には戸惑いがある。「論文」という枠に守られた「詩心のない文章」が少なくないからである。**

哲学であり詩である言葉の力…研究の根っこを支える「熱」はそんな文章との出会いから生まれるものなのでしょう。私たちにとっての論文とは何かを，今だからこそ改めて考えていきたいと思っています。

理事通信　Director's Message

研究を通し、社会に関わるために

理事（事業部）　神野真吾（千葉大学）
Director: Operations Department, Shingo JINNO, Chiba University

私が最初に就いた職業は美術館の学芸員でした。1995 年の４月に着任し，11 年間現代美術の展覧会の企画や教育プログラムの企画に携わってきました。1995 年というのは，１月 17 日に阪神・淡路大震災が起こり，３月 20 日には地下鉄サリン事件があった年です。今年の正月にはみなさんご存じの通り，能登半島地震が起こり，今も多くの被災者の方々が批判を余儀なくされ，復旧の見通しの立たない状況が続いています。安部晋三元首相が 2022 年に銃撃され殺害されたのは一年半前のことであり，私たちを不安にさせる災害，社会的な事件は，常に起こり続けています。世界に目を向けても，同様のことが言えます。

個人的な経験として，私が研究者という存在の重さを感じたのは，実は先述の地下鉄サリン事件においてでした。東京藝術大学の修士課程を終えた後，就職する前の二年間，社会学を学ぶ必要性を感じた私は東京大学の社会情報研究所（現情報学環）の研究生をしていました。そこで社会学者の吉見俊哉さんと出会います。当時若手の助教授であった吉見さんは，日本におけるカルチュラルスタディーズの本格的な実践に向けた準備に取り組んでおり，当時は芸術を専門とする者が社会学の領域に関わることが少なかったこともあり，私にも折に触れ声をかけていただき，就職後も末席でさまざまな議論が交わされる場を経験させてもらいました。地下鉄サリン事件が起きてから，吉見さんがかなり深刻にその問題をとらえていることを知る機会がありました。わが事のようにその事件について思い悩み，それに研究者として何かしらの答えを見出したいと思い悩んでいる姿でした。

当時の私には,そうした大きな問題を自分事として捉え,自分の専門を通してそのことを考えるということは,そうすべきであるということが頭で分かっていても，リアリティとか，自分の社会的な責任とか，なにか少し距離を感じてしまっていて，自分がそんなことを考えても仕方がないとか，考える資格がないとか，心のどこかでそのように思っていたように思います。吉見さんの姿を見ることで，社会の中で起こる様々な出来事について自分自身で，自分自身の専門を通じて，考え，発言することが，研究者に求められることなのだと強く考えるようになりました。

さて，私たちの専門とする美術及び美術教育（美術科教育も含む）を通して，私たちは社会的な課題についてどのように考え，どのような発言をすることができるのでしょうか。もちろん多様な美術のとらえ方があり，様々な経験を経た人たちがこの領域で研究に取り組んでいるので，同じ一つの答えに至ることはないでしょうし，それで良いとも思います。ただ，この領域が社会的に大事にされてきたことの根底にあることを確認してみることには，少なからず意味があるように思います。それはいまの時代において，より重要性を増しているようにも思えます。それは,「人権」ではないかとわたしは考えます。人権の中にはさまざまな権利が含まれますが，私たちが自由に感じ，考え，それを表現するということは，人権が尊重されて初めて守られることです。私たちが関わる美術および美術科という教科が大事にしているものが，人権を前提として成り立っていることは言うまでもありません。しかし，それは自明のことで，何もせずとも保証されているものでしょうか。日本では，多くの人が当たり前のこととして深く考えていないように感じます。それは美術科においても同様ではないかと感じます。

何人が死んだとか，何百人が死んだとか，何千人，何万人が死んだとか，日々のニュースが伝えるその向こうにある現実では，その一人一人の権利が守られ尊重されていれば，実現されたであろう何事かが，確実に失われています。それがどんなささやかなことであれ，確実に失われているのです。ロシアによるウクライナの侵略，イスラエルとパレスチナの暴力の応酬を見るにつけ，そのことを考えずにはいられません。平和が保たれ，個々人の権利が尊重されている世界であれば，人権について考える必要はないかもしれません。しかし，進歩してきたはずの世界は不安に満ち，後退しているように見えます。災害についても同様です。被災した人たちの人権をこの国が大事にしているようには思えない状況が繰り返されています。

言うまでもなく，一人一人を尊重し，その違いを認め，その違いを個性とみなし価値づけることで美術は成り立っています。それは表現のプロフェッショナルとしての美術家から教室の中の子どもたちまで同じはずです。それぞれの場所でその美術の価値を輝かせ続けるためには，それが可能となる環境を守るための不断の努力をしなければなりません。私たちは，研究を通して社会に関わろうとすることで，それを実践しているのだと思いますが，その際にあらためて人権について考えることが，今強く求められていると考えています。

理事通信　Director's Message

学術界の急速な変化／学会のさらなる充実を願って

理事（研究部）　竹内晋平（奈良教育大学）
Director: Research Department, Shimpei TAKEUCHI, Nara University of Education

これまでの美術科教育学会との関わり

このたび，美術科教育学会通信での「理事通信」執筆の機会をいただきました竹内晋平です。はじめに，私が本学会と関わってきたこれまでの経緯について簡単に紹介させていただきます。

私が現職教員としての勤務と並行して京都教育大学大学院で学んでいた時期に，恩師である石川誠先生よりお薦めいただいて本学会に入会いたしました。ちょうど，第 28 回 美術科教育学会 京都大会（2006 年）も開催され，そこで初めての口頭発表を経験しました。以降，大会での発表や学会誌『美術教育学』への投稿を重ね，そのたびに多くの先生方から温かい叱咤激励のお言葉をいただき，今に至っています。これまで育てていただいた本学会の先生方,そして研究について忌憚なく語り合うことができるつながりをお許しいただいている先生方に,心より感謝申し上げます。

本学会の理事としては，現在の勤務先に赴任後の 2013 年から担当させていただき，総務部（2013～2016 年，2019～2022 年）・研究部（2022 年～）ので業務を経験し，３期目となります。

現在の研究部での業務

私は現在，研究部に所属して副代表理事（学会誌編集委員長）の大泉義一先生をはじめ９名の理事の先生方とともに業務に携わっております。業務の中心は，学会誌『美術教育学』の編集・刊行に関することです。本学会の会則によると「研究部は，学会誌の編集・発行，研究部会の管理，研究資料の収集及び調査など，研究にかかわる企画・運営を行う」とされています。このような業務全般に関する企画・運営を研究部の先生方と担当しています。

学会誌の編集・発行に当たっては，「研究の水準を維持すること」，そして「会員の研究成果を広く発信すること」の両面が必要であると考えています。査読を含む学会誌編集のプロセスにおいては，美術科教育の各領域を専門とする多くの先生方から査読のご協力を得て,学術的価値の高い研究論文が毎号掲載されています。今後も，掲載されることが会員にとっての目標であり続けるよう，学会誌『美術教育学』の質を維持することが研究部の責務であると考えます。また，研究成果の発信に関する国際的な動向としては近年，刊行された論文を速やかにオープンアクセス化することへの需要が高まっています。従来，学会や出版社は学術雑誌の公開に際して，エンバーゴ（閲覧を制限する一定の期間）を設定してきました。その一方で，この数年間に刊行された COVID-19 に関する研究論文が即時にオープンアクセス化されたことによって，ワクチン・治療薬開発等に貢献してきたことが米国科学技術政策局によって示されているとの指摘[1)] もあります。この例が端的に示しているように，論文公開に際して出版側および閲覧側の権利をどのように解釈していくのかという論点は，極めて重要なものになりつつあるといえます。

美術科教育学会のさらなる充実を願って

私が美術科教育学会に入会させていただいてから約 18 年が経過しようとしています。本学会が担う役割は当時から大きく変わっていませんが，学術界をめぐる潮流は急速に変化しています。本学会が直面する諸課題に対応し，会員の皆様にとってさらに有益な研究コミュニティとなるため，総務部・研究部・事業部の担当者が一丸となって学会運営に当たっております。本学会の様々な取組等に関する情報発信は，この美術科教育学会通信をはじめ学会 Web サイト，そして一斉配信メール等を活用してその都度行っておりますので，ご関心をお寄せいただけますと幸いです。

1）　内閣府 科学技術・イノベーション推進事務局「論文等のオープンアクセスについて（論点とりまとめ）」
下記 URL を 2024 年 1 月 18 日 確認
https://www8.cao.go.jp/cstp/gaiyo/yusikisha/20230525/siryo1.pdf

本部事務局より　Notice from the Secretariat

■学生会員制度の導入と大学院生等への会費減額措置の廃止について

学生会員制度が開始されました。学生会員は，学部・大学院の正規課程に在籍する学生が対象で，在職の有無は問いません。ただし，聴講生，研究生，科目等履修生は対象外となります。年会費 500 円で，学会誌の受領と論文投稿の資格を有する（学部生は除く）会員となります。

詳しくは，https://www.artedu.jp/jaaed/nyukai をご覧ください。なお，学生会員制度の導入に伴い，会費減額措置の制度を廃止しました。

■会費納入をお願いします

３月の大会，リサーチフォーラム，学会誌刊行などの学会運営は，会員の皆様の会費により運営されています。ご自分の各年度の年会費納入状況については，以下の「会員情報管理システム」にログインすることにより確認が可能です。
https://service.gakkai.ne.jp/society-member/auth/AAE

なお，納入状況に疑問がある場合には，下記の本部事務局支局アドレスにお問い合わせ下さい。

留意事項

学会誌への投稿並びに大会での口頭発表に際しては，投稿や申込みの時点で以下の２つの条件を満たしている必要があります。

①会員登録をしていること
②当該年度までの年会費を全て納入済みであること。
＊会費を２年間滞納した場合は，会員資格を失います。

会費納入に関するお問い合わせ先：
（株）ガリレオ 東京オフィス 担当者 和久津 君子
［窓口アドレス］g030aae-mng@ml.gakkai.ne.jp

■会費振り込み口座名・番号

会員の皆様に送付される振込用紙，郵便局にある払込用紙または銀行等からの振替により下記の口座に納入してください。

・銀行名： ゆうちょ銀行
・口座記号番号： 00140-9-551193
・口座名称： 美術科教育学会 本部事務局支局

通信欄には，「2022 会計年度会費」等，会費の年度および会員 ID 番号を記入してください。また，ゆうちょ銀行以外の銀行からの振込の受取口座として利用される場合は，下記内容を指定してください。

・店名(店番)： 〇一九(ゼロイチキユウ)店(019)
・預金種目： 当座　・口座番号： 0551193

■住所・所属等変更，退会手続き

住所，所属先等に変更のあった方は，すみやかに本部事務局支局までご連絡ください。退会を希望される場合は，電子メールではなく，必ず文書（退会希望日を明記してください）を郵送にて，本部事務局支局宛にお送りください。あわせて，在籍最終年度までの会費納入完了をお願いします。

美術科教育学会 本部事務局支局
〒170-0013 東京都豊島区東池袋２丁目 39-2-401
（株）ガリレオ 学会業務情報化センター 担当 和久津 君子［窓口アドレス］g030aae-mng@ml.gakkai.ne.jp

■学会誌第 45 号に投稿され，掲載負担金について公費払いを予定している会員の皆様へ

学会誌第 45 号に投稿された会員で，掲載が許可された後，掲載負担金について公費払いを予定している会員の皆様にお知らせします。公費払いとは，大学研究費や科学研究費補助金などで支払うことをさしています。掲載負担金は，掲載ページ数が確定した時点（３月初旬を予定）で請求します。本部事務局支局からの請求書にしたがってお振込みください。ただし，各所属先が求める形式で請求書類を別途用意しなくてはならない場合は，そこから本部事務局支局と相談・交渉し始めたのでは，手続きが間にあわないことがあります。以下の留意点を読み，各所属先で前もってご確認いただき，相談・交渉するなど今から準備を始めて下さい。

＜留意事項＞

１．原則として，必要な書類は，投稿者自身で作成いただき，書類等に捺印が必要な場合は，本部事務局支局までお送りください。作成いただく書類は，本部事務局支局からの「振込負担金請求書」以外の書類全てとなります。また，送付前に事前に以下までご連絡下さい。
２．投稿者自身による「立替払い」を原則と致します。
３．上記１，２を原則としますが，大学事務局と本部事務局支局が直接やり取りをしなければいけないケースがあります。この場合には，以下まで，手続きの概要，事務担当者の連絡先などをメールで知らせて下さい。

■住所・所属等変更，退会手続き

住所，所属先等に変更のあった方は，すみやかに本部事務局支局までご連絡ください。退会を希望される場合は，電子メールではなく，必ず文書（退会希望日を明記してください）を郵送にて，本部事務局支局宛にお送りください。あわせて，在籍最終年度までの会費納入完了をお願いします。

■美術教育学叢書について

美術科教育学会編集発行の『美術教育学叢書』の１・２号の Kindle 版について，2023 年６月より，従来の PDF 画面から，より見やすい「リフロー型」に変更いたしました。３号以降も，電子書籍化の際はリフロー型とします。

■新企画「理事通信　Director’s Message」について

学会通信において、従来の代表・副代表による巻頭言だけでなく、日々ご活躍いただいている理事からの会員向けメッセージを順に掲載することによって、学会の動きや各理事の考えなどをより親しく会員に伝え、学会の今後を共に考えていく機会を増やしていきたい。そのような思いから、2023年９月の理事会で「理事通信」の欄を設けることをご提案し、今号から掲載を開始することになりました。今号は佐藤理事、神野理事、竹内理事からのメッセージをお届けしています。今後の掲載予定は下記の通りです。（直江俊雄）

学会通信116号　2024年６月
宇田秀士　中村和世　西村徳行　山田芳明　渡邉美香

学会通信117号　2024年10月
池田吏志　郡司明子　手塚千尋　藤井康子

学会通信118号　2025年２月
永守基樹　水島尚喜　山木朝彦

（以上）

美術科教育学会 本部事務局
The Japanese Association of Art Education's Secretariat

■〒305-8574　茨城県つくば市天王台1丁目１－１　筑波大学芸術系
直江俊雄（代表理事/教科教育学コンソーシアム理事）naoe@geijutsu.tsukuba.ac.jp
吉田奈穂子（本部事務局員/会員名簿）yoshida.nahoko.gn@u.tsukuba.ac.jp

■〒184-8501　東京都小金井市貫井北町４－１－１ 東京学芸大学
相田隆司 （総務担当副代表理事/本部事務局長/庶務・会計・規約）t-aida@u-gakugei.ac.jp

■〒371-8510　群馬県前橋市荒牧町４－２　群馬大学
郡司明子（本部事務局理事/会費管理）gunji@gunma-u.ac.jp

■〒108-8636　東京都港区白金台１－２-37　明治学院大学
手塚千尋（本部事務局理事/ウェブ）tetsuka@psy.meijigakuin.ac.jp

■〒870-1192　大分県大分市大字旦野原700番地　大分大学
藤井康子（本部事務局理事/学会通信）fujii-yasuko@oita-u.ac.jp

■〒169-8050　東京都新宿区西早稲田１丁目６－１　早稲田大学
大泉義一(研究担当副代表理事/学会誌編集委員長）oizumi@waseda.jp

■〒187-8505　東京都小平市小川町１-736　武蔵野美術大学
三澤一実(事業担当副代表理事/リサーチフォーラム統括/8団体連携会議）kmis@musabi.ac.jp

□美術科教育学会 本部事務局 支局
■（株）ガリレオ(https://www.galileo.co.jp/)　学会業務情報化センター
〒170-0013　東京都豊島区東池袋２丁目39-2-401
（ 担当者 和久津君子 ）　TEL　03-5981-9824　FAX　03-5981-9852